

## ハイデガーの共同存在論

奈良県立医科大学医学部看護学科

池 辺 寧

Heideggers Analyse des Mitseins

Yasushi IKEBE

*Faculty of Nursing, School of Medicine, Nara Medical University*

### 要 旨

従来、ハイデガーに対して他者論の不徹底が指摘されてきた。たしかにハイデガーは他者を主題としているわけではない。だが、彼は他者の問題を決して看過していない。現存在が他者との共同存在である以上、ハイデガーは現存在の存在を問うとき、他者の存在もつねに問うている。本稿ではこうした観点に立って、ハイデガーが他者をどのように捉えているのかを論じた。まず、ハイデガーは他者を世界のほうから了解されると捉えている点に着目した。現存在の世界は共同世界であり、世界を分析することのうちに他者もすでに含まれている。次に、彼は他者を私と同じ世界に現れるとみなしていることを取り上げた。同じ世界に現れるがゆえに、現存在は相互に関わり合うことができる。現存在は根源的に相互共同存在である。最後に、本来的自己と他者との関係について論じ、本来的自己は他者とのあいだに本来的な関係を築くためにも必要であることを指摘した。

キーワード：ハイデガー 共同存在 相互共同存在 他者 世界

### 1. はじめに

ハイデガーは晩年（1965年）、既刊の『存在と時間』を振り返って次のように述べている。「『存在と時間』のなかで私は、現存在にとって自らの現存在それ自身にかかわりゆくことが本質的に問題であると述べた。だが同時に、現存在それ自身を根源的な相互共同存在として規定した。したがって、現存在にとっては他者にかかわりゆくこともまた、つねに問題である。そうである以上、現存在の分析論は独我論や主観主義とはまったく関係がない」（ZS151）。ハイデガーは『存在と時間』のなかで、一章を割いて他者の問題を論じている。だが、共同存在や共同現存在、あるいは相互共同存在といった術語が提示されたものの、本来的自己にとって他者とはいかなる存在なのかは結局、不明瞭なままに終

わっている。そのため、ハイデガーの分析に対して、独我論や主観主義といった批判がなされることになる。いち早く批判したのは弟子のレーヴィットである。『存在と時間』が刊行された1927年、レーヴィットはハイデガーのもとに教授資格論文を提出し、翌年、同論文を『共同人間の役割における個人』と題して出版した。レーヴィットはこの書のなかで、ハイデガーは「自己自身への極端な単独化」に主眼を置いており、相互共同存在としての世界を実存的に重要でないとみなしている、と批判している。つまり、ハイデガーは、相互共同存在の本来的に積極的な可能性を看過しているというのである<sup>(1)</sup>。

たしかに『存在と時間』を読むかぎり、こうした批判はわからなくもない。『存在と時間』における他者論の不徹底はこれまで繰り返

返し指摘されてきた。だが、主要なものがほぼ出揃いつつある講義録を繙くと、他者に対するハイデガーの強い関心が随所で窺える。むしろ、レーヴィットからの批判を意識して、ハイデガーは他者の問題に頻繁に言及するようになった、とみることはできるだろう。ハイデガーが折に触れて言及している我—汝関係への批判には、直接名指しされているわけではないが、レーヴィットに対する反論が込められている<sup>(2)</sup>。しかし、レーヴィットからの批判を取り入れた結果という面を差し引いても、共同存在や相互共同存在にいたるところで言及しているハイデガーに対して、他者の問題を看過していたとみなすことはできない。本稿では、こうした観点から、ハイデガーにおける他者の問題を考えていきたい。

## 2. 世界のほうから了解される他者

ハイデガーは『存在と時間』で、現存在を他者との共同存在と捉え、現存在の世界を共同世界とした。だが、『存在と時間』では、他者は日常的に接する世人として分析されているだけであり、他者との本来的な関係については示唆的に語られている箇所（SZ298、後述）があるにすぎない。言うまでもなく、ハイデガーの主題は存在の意味を明らかにすることである。この意図を果たすための手がかりとして、彼は現存在のあり方を問い、事物や他者との関わり方を分析した。彼が論じているのは、現存在は他者とどう関わっているのか、ということである。ハイデガーはあくまで、存在論的な次元で他者を分析しているのであって、人間学的な関心から他者を論じているのではない。レーヴィットの批判はこの点を十分に踏まえた批判とは言い難い。グレーシュもレーヴィットが行った批判の功績を認めつつも、「ハイデガーが定位している存在論的次元を完全に誤認しているのではないか」と問い、さらにこう述べている。「レーヴィットによる正面からの批判のおかげで、『存在と時間』以降の論考ではハイデガーの側にも数々の反応があり、我—汝関係へ

とより大きな注意が向けられることになったのはたしかである。とはいえ、自分の分析の方向が人間学的ではなく存在論的なものであるということは、ハイデガーにとって一切曲げる必要のない事柄だったのである」<sup>(3)</sup>。

ハイデガーが行った他者の分析は、日常的な現存在の行動の特性を記述したものであって、ここには私は他者とどう関わるべきか、という道徳的評価を行う意図は含まれていない（vgl.GA20,337）。彼に従えば、事物に関わることも他者に関わることもいずれも現存在の本質に属していることである。両者は等根源的であり、いずれかが他よりも優位にあるわけではない（GA27,118）。「現存在は根源的に他者と共にある存在であることに応じて、根源的に手許存在者および眼前存在者と共にある存在である」（GA24,421）。つまり、現存在は、まずはじめに諸々の事物のもとで存在し、後になって事物のあいだに他者を発見して他者との共同存在になるのでも、その逆でもない。われわれはいかなるときでも様々な仕方で事物や他者と関わっている。したがって、たとえば「自己のあり方を問う」といった思索も、決して自己の内面に沈潜することではなく、私はいかにして事物や他者と関わっているのかを問うことにほかならない。そこで、ハイデガーは次のように述べる。「現存在は自己自身にかかわりゆくことが問題である存在者として、等根源的に他者との共同存在であり、かつ、世界内部的存在者のもとの存在である」（GA24,421）。

ハイデガーはこのように考えているものの、『存在と時間』では環境世界については道具連関などが丹念に分析されているのに対して、共同存在の分析は不十分である。それゆえ、種々の批判にさらされることになる。批判の一例を挙げておく。「人間共同性における愛と憎み、支配と服従などの生ま生ましい関係はここでは全く見当らず、唯よそよそしく当り障りのない人間関係だけが述べられている」<sup>(4)</sup>。後述するように、ハイデガーは現存在を相互共同存在と捉え、たえず他者と

関わり合っている存在とみなしている。そのかぎり、ハイデガーも現存在の相互共同性 (Miteinander) に着目しているが、愛と憎しみ、支配と服従などの人間関係を具体的に分析するまでにはいたっていない。そのため、上で挙げたように、生々しい人間関係は論じられていない、といった批判がなされることになる。もっとも、ハイデガーに対して、「当り障りのない人間関係だけが述べられている」と批判することはできない。というのも、ハイデガーが提示した世人というあり方は、お互いに無関係に併存し合っているような関係ではないからである。むしろ、相互に監視し合っている緊張に満ちた関係である (SZ 175)。世人の分析は人々のあいだに横たわる相互不信を下地にしているのもあって、「当り障りのない人間関係」を記述したものではない。

とはいえ、『存在と時間』では共同存在の分析が不十分であるという印象を拭うことはできない。たとえばレーヴィットの影響を受けた和辻哲郎も、ハイデガーが人と人との交渉を閑却していることは明白な事実であると批判している<sup>(5)</sup>。講義録が公刊されている今日、「人と人との交渉」の分析が閑却されていると解することは困難であろう。だが、ハイデガーは他者を主題的に論じている、と評することもたしかにできない。彼は事物に関わることも他者に関わることも等根源的であるとみなしたものの、実際には前者の分析に重点を置いている。このことをどう捉えるかだが、ここでは「意図的 (absichtlich)」という語に着目したい。ハイデガーは『存在と時間』刊行以前の 1925 年夏学期講義、および 1925/6 年冬学期講義のなかで、こう述べている。

引用 1)

「われわれは、環境世界のうちで共に現に存在している (他者) という現象を、われわれが取り扱っている現象的連関において見落とさなかつただけでなく、環境世界で

出会っている諸事物のみに意図的に世界の分析の照準を合わせてきた。このことは、世界の分析を暴力的に狭める。しかし、それは後に示すように、主題そのものから要求されたことである」(GA20,327. 強調は引用者、以下同様)。

引用 2)

「われわれは意図的に他者との共同存在、顧慮としての気づかいを考察しない。しかも、それは、われわれが世界についての陳述だけを主題とし、他者についての陳述を主題としない、という理由からではない。たとえ世界についての陳述においてであっても、他者は後に実証されるように、何らかの仕方で (現に) 存在している。ただ、他者についての陳述を行うという現象は本質的にかなり難しく、さらに別の考察を前提とするであろう」(GA21,235)。

ハイデガーは『存在と時間』、およびその草稿ともいえる 1925 年夏学期講義において、環境世界における諸事物をまず分析し、次いで共同存在や他者の分析に着手している。そのことによって、世界の分析に偏りが生じていることを、ハイデガーは「意図的」とみなしている (引用 1 参照)。彼が「意図的に」環境世界の分析に重点を置いたのは、他者は世界のほうから了解されており、世界についての分析のうちにすでに他者が含まれているからである。

『存在と時間』でもハイデガーは、「意図的」という語こそ用いていないが、道具や自然といった現存在以外の存在者に分析を制限したことは、説明を簡単にするために必要であったばかりでなく、他者という世界内部的に出会われる現存在のあり方を、手許存在性や眼前存在性から区別するためにも必要であった、と述べている (SZ118)。他者もまた世界内部的に出会われる存在者であるが、手許存在者や眼前存在者とは違う。対物的な関係での分析の仕方を援用して、対人的な関係を分析できるわけがない。他者は現存在 (私)

と同じように存在している共同現存在であって、諸事物とは「本質的な相違」(vgl.SZ122)がある。他者の分析は環境世界における諸事物の分析とは異なり、本質的にかなり難しいため(引用2参照)、諸事物の分析から先に着手したというのである。

ハイデガーは、他者は世界のほうから了解されると考えている。彼に従えば、われわれが会う他者とは、何かに従事して「地位、外見、業績、成功や失敗」(GA63,99)などに基づいて了解される存在であるか、何らかの手許存在者(たとえば畑や車など)の所有者や利用者などとして了解される存在であるか、である。後者の場合、他者は「世界内部的な手許存在者のほうから多様な仕方であ会われている」(SZ120)。この場合、われわれは手許存在者を介して道具連関のうちで他者と会うことになるゆえ、「非主題的に」他者と出会っているということが出来る<sup>(6)</sup>。もっとも、非主題的といっても、他者は追加的・副次的に出会われているのではなく、手許存在者と共に出会われている。一方、前者の場合には、われわれは主題的に他者と出会っている。ただし、「他者がその現存在においていわば主題的になるときでも、……われわれは〈仕事をしている〉彼ら、すなわち、まずは自らの世界内存在のうちにいる彼らと出くわしている」(SZ120)。つまり、この場合でも他者は世界のほうから出会われているのであって、「主題的になる」といっても、「いわば」という限定を伴う。こうした仕方での他者との出会いが、「現存在にとって最も身近で基本的な、世界からの出会い方」(SZ119)である。ハイデガーによれば、他者が世界のほうから出会われるのは「日常的現存在の現象的な根本実態」であるゆえ、世界のうちで共に出会われる他者が際立たされないことは、方法的に意図されていたことだという(GA20,327)。

これに対してレーヴィットは、人間的な環境という意味での環境世界は共同世界があつてはじめて現れるのであり、共同世界のほう

が根源的であると考えている<sup>(7)</sup>。和辻も、「我々は「もの」と係わる前に「人」と係わっている。……我々は現実において道具を見いだす時すでに他人との間柄に立っている」と述べている<sup>(8)</sup>。彼らはこのように主張することによってハイデガーを批判するわけだが、事物との関わりと他者との関わりとは、先に触れたように等根源的である。私が他者と出会う世界は、環境世界であると同時に、共同世界でもある。こうした世界に他者は私と共に存在しており、この世界のほうから私は他者を了解している。したがって、環境世界よりも共同世界のほうが根源的である、「もの」よりも前に「人」と関わっている、といった前後関係をここに見いだすことはできない。ハイデガーは、「現存在はまず最初は他者との共同存在にすぎず、次いで他者との相互共同存在からある客観的な世界へ、諸事物へと出ていく、というのではない」(GA24,421)と明確に否定している。

ハイデガーが否定しているのは、他者との共同存在がまず先にあるという時間的順序であつて、現存在が他者との共同存在であることは彼が繰り返し強調するところである。現存在は、他者がすでに存在している世界のなかで生活しているのであり、いかなる行為も他者との関わりの中かに置かれている。どんな仕方であれ、存在している以上、現存在は他者と関わらざるをえない。それゆえ、現存在が他者との共同存在であることを語る際、ハイデガーは「本質的」(SZ120)とか、「生来(von Hause aus)」(GA24,420, GA29/30,302)といった語句を添える。

ところで、レーヴィットが言うように、環境世界は他者の不在という仕方でも共同世界的に性格づけることができる<sup>(9)</sup>。たとえば、われわれは人通りのない道を「さびしい道」と形容する。道の両側に家が密集していようとも、道端に花が咲き誇っていようとも、さびしく感じるのは人の気配がしないからである。この場合、他者は不在という仕方、自らの存在を主張している<sup>(10)</sup>。レーヴィット

は人間を共同人間 (Mitmenschen) と捉え、「共同人間は差しあたって、共同世界としての世界において人に出会う」と言う<sup>(11)</sup>。この一文は彼の著書『共同人間の役割における個人』第二編「相互共同存在の構造分析」の第一節の見出しであり、彼の主張の核となるものである。こうした主張に基づき、レーヴィットは環境世界よりも共同世界のほうを根源的とみなした。

だが、こうした主張はハイデガーに対する批判にならない。むしろ、ハイデガー自身も語っていることである。彼が繰り返し強調するように、一人で存在しているときでも、現存在は共同存在である。共同存在とは現存在の実存論的な規定である。ハイデガーは1927年夏学期講義で次のように述べているが、この箇所には彼の考えがよく表れている。「現存在は差しあたってたいてい、諸事物から自らを了解している。だが、他者、共同人間もまた、彼らが直接手の届く近さのうちで見いだされないときでも、共に現に存在している。したがって、彼らは共に現に存在するという仕方、諸事物から共に了解されている」(GA24,409f.)。

ここで言う他者とは、私との関係のなかですでに何らかの役割を付与された人のことである。われわれはいかなる役割も付与されていない「裸の他者」と関わることができない。他者は環境世界において、その従事するところのものを通じて出会われる。ハイデガーが挙げている例を用いれば、われわれが出会う他者とは、「靴屋、仕立屋、教師、銀行家」(GA20,336)、等々である。それゆえハイデガーは、他者は環境世界において出会う、諸事物から共に了解されるというのである。もっとも、他者は諸事物と相並んで存在しているわけではない。言うまでもなく、他者は事物ではない。ハイデガーも次のように述べ、他者を事物と捉えてはならないことを繰り返し明記している。「他者がただ単に諸事物として出会われるならば、他者はおそらくまさに現に存在しないであろう」(GA20,329)。「他

者が〈単にぶらぶらしている〉のをわれわれが見かけるときでさえ、その他者は眼前に存在している人間事物として捉えられているのでは決してない」(SZ120)。

ところが、ハイデガーは「として構造」に言及した箇所で、こんなことを言っている。「端的にあるものとかかわりを持つことのうちには、どのようにして、として構造がすでに存しているのだろうか。最も身近なことは、諸事物、すなわち机—ベンチ—家—警官を単純に見て、それらがあるがままに受け取っているということ、まさにこのことである」(GA21,145)。われわれは「諸事物や人々」(GA21,144)を〈…として〉了解している。そうした了解の仕方をハイデガーは「として構造」と呼んだ。彼はここで「として構造」を説明するうえでの例として、机、ベンチ、家と並んで、警官を挙げている。警官が挙げられていることに着目し、ハイデガーはレーヴィットに先立って、他者を「として構造」や役割から捉えようとしていたと指摘できよう<sup>(12)</sup>。だが、警官はここでは諸事物の例として挙げられている。どうして直前の箇所には記されていた「人々」という語が省かれ、警官を諸事物の一例に含めたのか、理解に苦しむ。この箇所は「うっかりとした誤り」のたぐいにすぎないのかもしれない。そうだとすると、このような誤りがみられるところに、ハイデガーの他者に対する問題意識の低さを指摘されても仕方があるまい。本稿は、ハイデガーは他者の問題を看過していないという立場に立って論を進めているが、こうした問題点は残る。

### 3. 私と同じ世界に現れる他者

他者が存在しているから、現存在は共同存在であると言われるのではない。ハイデガーは現存在を本質的に他者との共同存在であるとみなしている。つまり、共同存在とは、いま実際に他者が共に存在しているかどうかにかかわらず、そのつどの現存在を実存論的に規定した術語である。ハイデガーはまた現存

在を世界内存在と捉えているが、世界内存在という語は、現存在が世界のうちで様々な事物と関わっていることだけでなく、他者とも関わっていることも当然含意している。現存在が世界内存在であることは、他者との共同存在であることを意味する。共同存在とは「世界内存在の実存論的な構成要素」(SZ125)であり、「世界内存在と等根源的な、現存在の存在性格そのもの」(GA20,328)である。

現存在が存在している世界は、共同現存在が存在している世界でもある。共同現存在とは、世界内部で出会われる他の現存在、言い換えれば、「私自身が持っているのと同じ存在性格を有する他の現実」(DF163)のことである。もっとも私もまた、他の現存在から見れば共同現存在である。ハイデガーは、「固有の現存在は共同存在という本質構造を持っているかぎりにもみ、他者にとって出会われるものとして共同現存在である」(SZ121)と言う。

しかし、現存在は共同存在という本質構造を持っていることから直ちに、私もまた他の現存在から見れば共同現存在であることを導出することはできないであろう。私もまた共同現存在であることが言えるためには、私と他者は同じ存在性格を持って同じ世界に存在していること、言い換えれば、私や他者が持つ存在性格は互換可能であることに対する論拠を示す必要があるからである。だが、ハイデガーはこれらのことに対する十分な論拠を示しているとはいえない。むしろ彼は、他者との共同存在を現存在にとって否定不可能な根源的事実とみなし、そこから他者が私と同じ存在性格を持って、私と同じ世界に現れることを自明のこととして前提している。たしかに素朴に考えれば自明のように思われる。しかし、自明性を疑うことこそが、ハイデガー自身も別の文脈において語っていたように(vgl.GA29/30,258)、哲学的な思索の営みであったはずである。

ここで留意しておきたいことがある。他者には、私の把握を超えた側面もある。他者と

は、私にとってあくまで異質な存在である。だからこそ、他者の問題は一般に哲学の主題となる。ところが、ハイデガーにあっては他者のそうした側面が考慮されているとは言い難い。ハイデガーが考えている他者とは、私と同じ世界において私が捉えたかぎりでの他者でしかない。つまり、他者とは、私と同じ世界において私の延長上に存在している、「私自身が持っているのと同じ存在性格を有する他の現実」(DF163)である。ハイデガーは他者について次のように述べているが、この箇所は、彼が他者をどのように捉えているのかを顕著に言い表している。「他者が私にとって現に存在するかぎり、他者は私と共に現に存在する」(GA20,330)。

ハイデガーの場合、私と他者は同じ世界で同じ存在性格を有しているがゆえに、相互共同性という性格を持つ。「現存在はそもそも存在しているかぎり、相互共同存在というあり方を持つ」(SZ125)。相互共同存在とは、他者に対して実際にどのような態度をとっているのかにかかわらず、現存在が共同存在としてお互いに関わり合っていることを実存論的に規定した術語である。相互共同存在とはただ単に、現存在が相並んで併存しているようなあり方を指しているのではない。相互共同性という語には、尊重し合うことや協力し合うことだけでなく、論争し合うことや対立し合うこと、相互不信なども含まれる。さらにはお互いに無関心であることも含まれている。現存在は共同存在として、他者とのあいだでどんな関係にあろうとも、同じ世界において他者と関わり合っている。そうしたあり方を、ハイデガーは相互共同存在と名づけた。したがって、「共同存在とはつねに、同じ世界における相互共同存在を意味している」(SZ238)。

相互共同存在とは現存在が他者と関わり合っていることを指しているが、他者と関わり合ううえで欠かせないのは沈黙を含め、他者と語り合うことである。どんな語りも他者に向かってなされ、他者と共になされる(GA20,

362)。独り言や動植物に対する語りかけも、語りの欠如の様態にすぎないのであって、語りの本来の性格を否定するものではない。現存在は伝達、反駁、論争、等々の仕方では他者と関わり合っている。ハイデガーは現存在のそうしたあり方を相互共同存在という語で捉えた。相互共同存在とは「相互に話し合う存在 (Miteinander Sprechen)」（GA18,47）のことにほかならない。

語りの主要な役割は伝達である。「伝達とは、認識や体験をある主観の内面から他の主観の内面へと運び込むこと、といったことを指しているのではない」（GA20,363）。伝達とは、ある現存在が他の現存在と、話題となっている事柄などについての存在了解を共有することである。このことが可能なのは、現存在の存在了解にはすでに他者の了解が含まれているからである (SZ123)。現存在がある存在者に関わっていくことができるためには、その存在者の存在を漠然としてではあれ、すでに了解していなければならない。了解しているがゆえに、現存在は何かに関わっていくことができる。

了解とは孤立的な主観が何かを認識することではない。何かに関わっていく以上、了解は世界内存在に関係づけられている。しかも、現存在は世界内存在として共同存在であるがゆえに、現存在の存在了解にはすでに他者の了解が含まれている。と同時に、私もまた他者から了解されている。ナンシーが言うように、存在了解は私による他者の了解であるとともに、他者による私の了解でもある。つまり、相互了解にほかならない<sup>(13)</sup>。ハイデガー自身も次のように述べている。「了解とは認識の仕方ではなく、世界内存在そのものの一次的なあり方なのだが、世界内存在そのものが了解であり、しかも相互共同存在が現存在の根源的な構成と捉えられるかぎり、相互共同存在はそれ自身、相互了解である」

(GA20,334)。なお、現存在は他者との共同存在である以上、いま引用した一文にみられるように、相互共同存在は現存在の根源的な

構成であって、他者と関わり合っている日常的なあり方のみを特徴づけた語ではない<sup>(14)</sup>。

アリストテレスによれば、人間はロゴスを持つがゆえに語ることができる。ロゴスを持つことは人間に固有の特性である。人間はロゴスを持ち、語る動物であるかぎり、たとえ一人で存在しようとも他者の存在はたえず想定されている。というのも、まったくの孤立した存在であれば、語るということはないからである。したがって、アリストテレスは人間を、ロゴスを持つ動物であると規定したが、この規定には、人間はポリス的動物であるという規定が含まれていなければならない (GA18,56)。ロゴスを持つ動物、ポリス的動物という、アリストテレスが掲げた人間に関する二つの定義は同じことを言っているのである<sup>(15)</sup>。そこで、ハイデガーはアリストテレスの人間についての規定を手がかりにして、現存在をポリス内存在と捉える。ハイデガーはこう述べている。「人間存在それ自身のうちには、ポリス内存在という根本可能性が存している。ポリス内存在のうちに、アリストテレスは人間の本来的な生を見てとっている。彼はそのことを示すために、人間存在はロゴスを持つこと (ロゴス・エケイン) であると指摘する。このような規定のうちには、〈相互共同存在〉、つまり共同体 (コイノーニア) として特徴づけられる人間存在のまったく特有で基本的な様式が含まれている」 (GA18,46)。現存在は語り合うことによって、他者と共に存在し、共同体をつくりあげている。現存在は相互共同存在であるがゆえに、共同体は成立するのであって、人々が集まって共同体をつくりあげているから、現存在は相互共同存在として性格づけられるのではない。

本稿では、ハイデガーが現存在を本質的に他者との共同存在であるとみなしたことに焦点をあてて論述を進めているが、彼が言う実存ないしは実存するという語も、現存在が他者との共同存在であることから説明することができる。というのも、実存とは、現存在が

つねに脱自的に存在者に関わっていることを言い表した術語であるが、現存在が関わっている存在者には他者も当然含まれているからである。ハイデガーは 1929/30 年冬学期講義でこう述べている。「ペットはわれわれによって家のなかで飼われているのであり、われわれと共に〈生きている〉。しかし、生きること (Leben) が動物のあり方における存在を意味しているならば、われわれはペットと共に生きているのではない。にもかかわらず、われわれはペットと共に存在している。しかしまた、この〔動物との〕共同存在は〔現存在の場合と違って〕、犬が実存しておらず、ただ生きているだけであるかぎり、共に実存していることではない。動物との共同存在とは、われわれが動物をわれわれの世界のなかで行動させている、というようなことである」(GA29/30,308. [ ] 内は引用者の補足。以下同様)。

ハイデガーは初期フライブルク講義では、人間を事実的生と捉えていたが、その後、生 (Leben) という語を人間 (現存在) に対しては用いなくなる。動物や植物は、石と同じように眼前に存在しているわけではない。しかし、現存在のようにある世界へと態度を取っているという仕方を実存しているわけでもない。そこでハイデガーは、動物や植物が他の存在者に関わっているあり方を生きることと名づけ、実存するという現存在の存在の仕方と区別する (GA25,20)。動物の場合、共に存在することがあっても、それはただ群れているだけにすぎない。一方、現存在の場合、共同体の一員として他者と運命を共にしている。それゆえ、現存在はポリス内存在と性格づけられる。この点に、動物の生と現存在の実存の相違が存する。ハイデガーは上で引用した箇所のほかにも、猫は実存しているのではなく生きている (GA26,159)、人間は生きているのではなく実存している (GA27,71)、と生きることと実存することの相違を執拗に取り上げている。この相違はまた、動物は友を持たず、現存在のみが友を持つ<sup>(16)</sup>、とい

うように理解することもできるであろう。

ハイデガーは私と他者との関係を「共に (Mit)」という語で特徴づける。「共に」とはこの場合、ただ単に一緒にいるのではなく、関与すること (Teilnahme) を意味する (GA27,85)。たとえ他者と関わらずに生きようとしても、それは「関与のヴァリエーション」(GA27,85) にすぎず、「共に」という現存在の存在性格を否定するものではない。なお、繰り返し述べるように「共に」という仕方で現れてくる他者は、あくまで私と同じ世界に現れる他者でしかない。それゆえハイデガーは、「他者はある一つの世界において、私と共に現に存在している」(GA20,330) とか、「汝とはある世界において、私と共に存在する汝を意味する」(GA24,422) と語るのである。

すでに述べたように、ハイデガーの眼目は存在の意味を明らかにするという意図のもとで、他者と共に存在している現存在 (私) とはどのような存在なのか、現存在は他者とどう関わっているのかを問うことにある。そうであるかぎり、ハイデガーは、現存在が他者との共同存在であることを論じているのであって、他者そのものの存在を論じているわけではない。こうした観点から、ハイデガーを批判することは可能であろう。たとえばブーバーは、ハイデガーにあっては固有の本質全体でもって語られた真の汝は存在しない、と批判している。ブーバーによれば、ハイデガーが語っている人間とは、ただ単に顧慮を払っているにすぎない人間であって、汝とはいえない<sup>(17)</sup>。たしかにハイデガーは、他者が私にとっては異質な存在であることを考慮しているとは言い難い。彼にあっては、他者は私と同じ世界に現れてくる存在にすぎない。そういった難点があることは払拭できないにせよ、ハイデガーもまた、現存在が他者との共同存在であることを現存在の根底に据えている。このことをここで確認しておきたい。



#### 4. 世人と本来的相互共同性

フィガールが指摘しているように、どんな行為であれ、現存在はある行為をするにあたって、その行為をまったく新たに発明し、行為しているわけではない。他者によってすでに現実化された行為の可能性に従っている。現存在の行為はつねに他者との関係のなかに置かれ、他者の影響下にある。しかも、このことは他者からの評価につねにさらされているという点において顕著である<sup>(18)</sup>。他者との差異、とりわけ優劣にたえず気を揉んでいるのが、現存在の日常的な姿である。ハイデガーはこうした姿を「間隔性 (Abständigkeit)」と性格づける (SZ126,GA20,337)。他者との隔たりや差異に気を揉みつつも、現存在はそのうえ、自ら、もしくは他者が突出する逸脱は嫌う。周知のようにハイデガーはこのような現存在のあり方を、世人と呼んだ。日常的な現存在の自己は、固有な自己という意味での私という存在ではなく、世人というあり方における他者、つまり世人自己である (SZ129)。

現存在は環境世界において、他者とその従事するところのものを通じて出会う。それゆえ、現存在が日常的に出会っている他者は、代替可能である。ハイデガーが言うように、どこかへ出かける、何かを持ってくるといった行為はすべて代替可能である。また、職業や身分、年齢などといった必要とされている一定の条件を満たせば、各人が置かれている境遇もまた代替可能である (SZ239)。というも、当該の状況で求められている行為をなすことができる資質がある者であれば、原理的には誰もが他者の代わりになることができるからである。もっとも、現存在を代替可能であると特徴づけることは、現存在を決して貶めることではない。現存在が相互共同性という性格を有するが、代替可能性は相互共同存在の構成要素として欠かせないものである。「ある現存在は一定の限界内では、他の現存在で〈あり〉うるし、それどころか〈あら〉ざるをえない」 (SZ240) とハイデガー

は言う。

以上のことからわかるのは、次のことである。現存在は他者からの評価につねにさらされているが、評価の対象となっているのは代替可能な行為や資質である。いくら希有な資質を持った人であろうとも、その資質がその人に与えられた必然性が存在しない以上、代替可能である。その人の資質が十全に発揮された生き方であっても、その人固有のものでないという意味では、非本来的である。ハイデガーは、「非本来性は、多忙、活気、利害、享樂などのきわめて充実した具体相にしたがって、現存在を規定していることがある」 (SZ43) と言う。つまり、自らの仕事に生きがいを感じ、多忙で活気に満ちあふれていようとも、しかも他者や社会から高く評価されていようとも、代替可能という点では非本来的なのである。

だが、現存在のすべての行為や境遇が代替可能なわけではない。ハイデガーは代替可能性が「全面的に挫折する」場合として、死を挙げる (SZ240)。代替不可能といえる例は他にも挙げられるであろうが、「全面的」という点では死よりほかにはないであろう。死は代替可能性が全面的に挫折するという意味で、他とはまったく異なる「ある特有の存在可能性」を意味する (SZ240)。「死は現存在の最も固有な可能性である」 (SZ263)。ハイデガーは『存在と時間』において、死へとかかわる本来的存在と非本来的存在の分析を行っているが、死は現存在には本来性と非本来性という二つの存在様態があることを、現存在に気づかせる。両者の相違は簡潔に言えば、自己固有か代替可能か、という点にある。

本稿の主題はハイデガーによる共同存在の分析であり、死の問題には立ち入らないでおく。ここで指摘したいのは、本来的自己といえども、やはり他者との共同存在にほかならない、ということである。現にハイデガーは、「現存在が自己自身を選ぶことにおいて、現存在は本来的に、まさしく他者との共同存在を選んでい」 (GA26,245) と述べている。

自己自身を選ぶことにおいて目指されている本来的自己とは、他者との関係を断ち切った孤立的なあり方なのではない。本来的自己であろうとすることは、相互共同存在であることから抜け出そうとすることではない。現存在は共同存在として、相互共同存在のうちにあくまで留まっている (GA20,342)。誰かと共に存在していることには変わらないが、最も固有な存在しうることに向けて企投し、代替可能な世人自己の可能性に向けて企投しないことが、本来的自己であろうとすることである (vgl.SZ263)。

問題は、本来的自己と他者との関係はどうなっているのかである。ハイデガーは、「決意性という本来的自己存在のうちからはじめて、本来的相互共同性が生じる」(SZ298)と云う。決意性とは最も固有な存在しうることに向けて決意することであるが、このことは現存在をその世界から引き離したり、現存在を宙に浮いた自我へと孤立させたりすることではない。決意性とはもっぱら自己自身に関わることであるが、現存在は本質的に他者との共同存在である以上、同時に、「共に存在している他者をその最も固有な存在しうることにおいて〈存在〉させる可能性」(SZ298)をはらんでいる。ハイデガーはこうした点に、本来的相互共同性が成立する基盤を見いだしている。だが、本来的相互共同性を持続させることは困難である。というのも、現存在は何らかの役割を付与された他者と「誰々として」という仕方であらうのであり、たとえお互いに最も固有な自己として存在していようとも、出会った瞬間にすでに代替可能な者同士の関係に変様してしまうからである。ハイデガーは本来的相互共同性について示唆的に語っているにすぎないが、これ以上、語ることができなかつたのかもしれない。

とはいえ、詳述することはなかつたにせよ、本来的相互共同性というあり方を、ハイデガーはたしかに考えている。彼はこう述べている。「もし現存在がある他者によって支えられ導かれていることを知ろうとするならば、

もし現存在が他者の共同現存在に対して開かれているべきであるならば、もし現存在が他者の為に尽力すべきであるならば、現存在は本質上、それ自身であることができなければならないし、本来的にはそれ自身であらねばならない」(GA27,324f.)。この一文にみられるようにハイデガーは、現存在が本来的自己であろうとすることは、他者とのあいだに本来的な関係を築くためにも必要であるとみなしている。

## 5. おわりに

冒頭で引用したハイデガーの晩年の発言に、「したがって、現存在にとっては他者にかかわりゆくこともまた、つねに問題である (Darum geht es dem Dasein immer auch um die Anderen.)」(ZS151)とあった。ハイデガーは *es geht...um...* という言い回しを、現存在の存在が問題であることを示すための定式として頻繁に用いている<sup>(19)</sup>。現存在は、冒頭の晩年の発言にもあったように、また本稿でこれまで論じてきたように、根源的な相互共同存在である。そうである以上、現存在それ自身にかかわりゆくことが問題であることは取りも直さず、他者にかかわりゆくこともまた、つねに問題であることにほかならない。現存在の存在が問われているとき、他者の存在も「また、つねに (immer auch)」という仕方であらうと問われている。冒頭で引用した晩年の発言は、「後知恵」や「辻褃を合わせるための弁解」などのたぐいの発言ではなく、ハイデガーの真意が表れた発言として字義通りに受け取ってよいであろう。

## 註

ハイデガーの著作等からの引用・参照頁は次の略号を用い、本文中に記した。

GA *Gesamtausgabe*, Frankfurt a. M. 1975ff.

(巻数, 頁数の順で記す)

SZ *Sein und Zeit*, 15.Aufl., Tübingen 1979.

ZS *Zollikoner Seminare*, hrsg. von M.Boss, 2.Aufl., Frankfurt a. M. 1994.

- DF Wilhelm Diltheys Forschungsarbeit und der gegenwärtige Kampf um eine historische Weltanschauung, hrsg. von F. Rodi, in: *Dilthey-Jahrbuch* Bd.8, Göttingen 1992/3.
- (1) Vgl. Löwith, K., *Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen*, in: *Sämtliche Schriften* Bd.1, Stuttgart 1981, S.96f.
- (2) ミハルスキは、ハイデガーがレーヴィットに反論している箇所として、1928年夏学期講義の一節 (GA26,241) を挙げている。(vgl. Michalski, M., *Fremdwahrnehmung und Mitsein*, Bonn 1997, S.181.)。ハイデガーは他にも随所で (GA24,394,421f., GA25,315,GA27,145f.usw.)、我-汝関係を批判している。我-汝関係に対するハイデガーの批判については、拙稿「ハイデガーにおける気づかいと自己性」(『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』第1号、2005年、17-19頁)を参照。
- (3) J・グレーシュ (杉村靖彦ほか訳) 『『存在と時間』講義』、法政大学出版局、2007年、192頁参照。
- (4) 安藤孝行『ハイデッガーの存在論』、公論社、1975年、50頁。
- (5) 和辻哲郎『倫理学 (一)』、岩波書店 (岩波文庫)、2007年、30頁参照。
- (6) Vgl. Michalski, a.a.O. S.189.
- (7) Vgl. Löwith, a.a.O. S.46.
- (8) 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』、岩波書店、1980年 (第53刷)、228頁。
- (9) Vgl. Löwith, a.a.O. S.30.
- (10) 熊野純彦『差異と隔たり』、岩波書店、2003年、86頁参照。
- (11) Löwith, a.a.O. S.29.
- (12) 拙稿「ハイデガーの世界概念 — 〈として〉構造をめぐる〉、『弓削商船高等専門学校紀要』第14号、1992年、79-80頁参照。
- (13) J-L・ナンシー (加藤恵介訳) 『複数にして単数の存在』、松籟社、2005年、71頁参照。
- (14) 『存在と時間』のある邦訳は、相互共同存在に「日常生活において」と限定をつけた註釈をしているが、この註釈は不適切であろう (原佑/渡邊二郎訳『存在と時間 (I)』、中央公論新社、2003年、323-324頁、訳註2参照)。
- (15) アリストテレスの人間に関する定義について、岩田靖夫も次のように述べている。ハイデガーと直接には関係しないが、参考になるので引いておきたい。「ロゴスをもつとは、ごく一般的にいえば、他者ととともに語り合うということであろう。だが、もっと根源的にいえば、そのような他者との意思疎通そのものを可能にしている共同存在の条理をもっているということ、すなわち、正邪善悪に関する「ことわり」を弁えているということである。この点に、他の動物たちに対する人間の固有性がある、とアリストテレスははっきりいっている。こうして、ポリスの存在としての人間の解明は、まずもって、法 (ノモス、ロゴス) の問題の解明へと収斂してきた、と行ってよいだろう」(岩田靖夫『アリストテレスの倫理思想』、岩波書店、1985年、238-239頁)。「知覚し思惟することは、人間がもし全く孤立した者ならば、成立しえないことである。……つまり、思惟することを止めれば、われわれは他者との連帯性から脱落し、同時に人間であることを止める。アリストテレスの人間に関するあの有名な二つの定義 — 「ロゴスを持つ動物」と「ともに生きる動物」 — は同じことをいっているのである」(同書、312頁)。その他、同書、39頁も参照。
- (16) Cf. Derrida, J., *Politiques de l'amitié*, Paris 1994, p.355. (鶴飼哲ほか訳『友愛のポリティックス (2)』、みすず書房、2003年、197頁参照)。
- (17) Vgl. Buber, M., *Das Problem des Menschen*, 6.Aufl., Gütersloh 2000, S.111.
- (18) Vgl. Figal, G., *Martin Heidegger zur Ein-*

*führung*, 3.Aufl., Hamburg 1999, S.67f.

- (19) ハイデガーが現存在の定式として用いた *es geht...um...* という言い回しについては、川原栄峰による詳細な検討を参照(川原栄峰『ハイデッガーの思惟』、理想社、1981年、17-50頁)。

付記)

本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「ハイデガー哲学における他者論の可能性と看護理論への応用についての研究」(課題番号 17520023)の研究成果の一部である。